

三石先生の退官にあたって

著者	進藤 榮一, 中村 紀一
雑誌名	筑波法政
巻	25
ページ	1-3
発行年	1998-12-15
URL	http://hdl.handle.net/2241/00156195

三石先生の退官にあたって

三石善吉先生は、本年（平成一〇年）三月、定年を三年後に控えて退官された。また学者らしい学者が一人、本学を去られたことは社会科学系のみならず、本学の東洋史・政治思想の研究と教育にとつて誠に痛手である。本号は、先生の退官記念号として編集されたものであるが、先生の強い希望によつて、通常の退官記念号の形式をとっていない。代わりに、この場をお借りして先生の研究・教育の足跡の一端を紹介させていただくこととしたい。

三石先生は、一九三七（昭和一二）年六月二二日、長野県に生まれ、七一（昭和四六）年に東京大学大学院人文科学研究所博士課程を単位取得満期退学後、東京大学文学部助手（中国思想文化学科）を経て、七六年四月に本学社会科学系に助教として就任された。以来二二年間、先生は、政治学・政治思想史の手法を用いて、中国政治思想の解明に努力され、その旺盛な研究活動の成果を、退官前の数年間に次々に単著として刊行されたことは我々の記憶に新しい。『中国の千年王国』（東京大学出版会、一九九一年）を初め、『伝統中国の内発的発展』（研文出版、一九九四年）、『中国、一九〇〇年―義和団運動の光芒』（中公新書、一九九六年）がそれである。これらの研究の独創性は、内外の研究者から幅広い支持と高い評価を受け、『中国の千年王国』の韓国語訳が高麗大学校から九三年に、また中国語訳が上海三聯書店から九七年に出版されている。また、『伝統中国の内発的発展』も北京中央編訳局より九八年中に翻訳出版が予定されている。

代表的な共著には小野沢精一郎ほか編『氣の思想』（東京大学出版会、一九七八年）や田中正美先生退官記念編集

刊行会編『中国近現代史の諸問題』（国書刊行会、一九八四年）などがあり、前者には「桐城派における氣—詩文論を中心として—」が、後者には「義和団と『以民制夷』の系譜」が収録され、いずれも東洋思想への深い洞察をうかがうことができる。また、中国近代史に関する多数の論文を『思想の研究』や『筑波法政』等に発表されているが、学術書の訳業にも熱心に取り組まれた。レイモンド・ドーソン『ヨーロッパの中国文明観』（共訳、大修館書店、一九七一年）、ジョナサン・スペンス『中国を変えた西洋人顧問』（講談社、一九七五年）、嚴家其『首脳論』（共訳、学生社、一九九二年）などは、文意を正確に伝えるという翻訳者の役割に忠実な名訳として知られている。

学界活動の面でも、「日本中国学会」や「中国社会文化学会（旧称・東大中国学会）」などの伝統ある学会のみならず、「筑波東アジア学会」などの新進学会でも中心的会員として貢献され、後二者の学会では長く評議員を務められている。

学内業務では、社会科学研究科長（一九八八—九〇年）、社会科学系長・筑波大学評議員（一九九四—九六年）を歴任され、この間、学系および研究科内外の宥和に献身的に努力されたことは、ここに記しておく必要がある。また、教育者としても、自らの研究時間を割いても学群生や院生、そして留学生の指導に綿密な指導を惜しまれなかったことも記憶しておきたい。また、先生の他の追隨を許さない貴重な研究領域は、他大学でも重宝され、埼玉大学教養学部で一〇年間もの間、中国近代思想史を講じられたのを初め、茨城大学人文学部、立教大学法学部、東京大学文学部などで非常勤講師を務められた。

人はそれぞれ心の葛藤がある。そのことをわきまえず、このような舌足らずの紹介を書き連ねることは先生にとっては不本意なことに違いない。しかしながら、先生の本学における足跡は、なおも教育と研究のあり方を模索する我

が社会科学系にとって、一つの道しるべであったように思われ、この一文を認めたことをお許しいただきたい。

先生は、この春より、同じつくば市内の東京家政学院筑波女子大学国際学部において教鞭をとられている。今後とも親しき友人として、また良き研究仲間として、末長く御友誼を賜るよう願ってやまない。

一九九八（平成一〇）年八月

社会科学系長

進藤 榮一

前・社会科学系長

中村 紀一